ぷらい vol.26 2023 AUTUMN 木材・合板博物館情報誌 ISSN 2435-1792

木材・合板博物館 PLY

木と人の素敵な出会いを探る

巻頭インタビュー ■ 第26回

人類が損ねた森林を再び人の手で取り戻す多様な森づくり

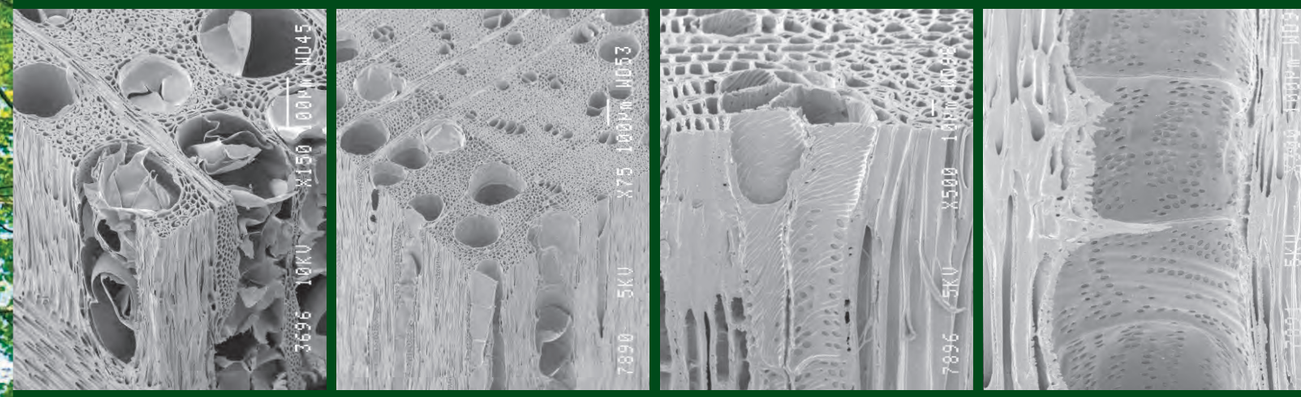
一般社団法人 more trees 事務局長

水谷 伸吉

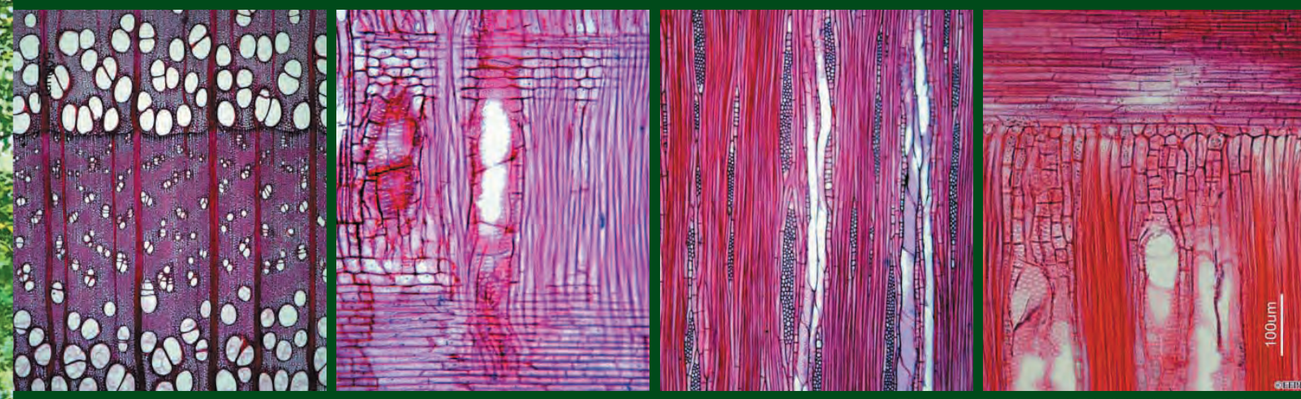
木を楽しもう 11

いつもと違う景色静寂の中で過ごす至上の時間 さぁキャンプをはじめよう

「ogawa GRAND lodge 新木場」



PLY 木の誌上展覧会 第２６回 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真 「ヤマグワ（Morus bombycis）」



写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

クワ科クワ属の落葉高木。北海道から九州まで広く分布する。沖縄や小笠原にはシマグワ（M. australis）が多いとされているが、ヤマグワと同種であるとの説もある。葉には不定形の切れ込みのあるものがあり異形葉とよばれる。養蚕に用いられる蚕の食用のクワはマグワ（M. alba）と呼ばれて中国大陸や朝鮮半島からの持ち込みであるとされているが、これとヤマグワとの雑種も多い。ヤマグワの実は赤黒く美味だが洋服に果汁が付着すると染みになる。

ヤマグワの木材の組織構造は、木口面では道管が環孔状に配列し、板目面では幅が広く背丈の大きな紡錘形の放射組織を持つ。径が大きな多くの道管要素にはチロースという膜状物質が詰まっており、小さな道管要素にはらせん肥厚があるものとないものがある。木材は心材色が焦げ茶色に近い茶褐色で重硬かつ緻密で光沢があり、さまざまな用途に使われている。古民家などでは床柱にも用いられ、箱ものなどの器具材や琴などの楽器用材さらには彫刻用材としても人気が高い。曲げやすいので桶を作るにも適するといわれている。

近年特に話題となっている小笠原諸島のみに分布するオガサワラグワ（M. boninensis Koidz.）は、当地の固有種であり、木材の心材には黒に黄色の縞模様が現れるなど美しい色調と木目で超高級材として賞揚されてきた。あまりの人気の高さに明治時代にそのほとんどを伐りつくしてしまったといわれ、現在は百数十本の個体を残すのみとなり、絶滅危惧種として保全の取り組みがなされている。現在、木材として出回っているのは、神代桑ともいうべき埋もれ木や廃材の再利用材が主である。

また、クワの仲間には同じクワ科のコウゾやカジノキがあり、和紙の原料として知られているが、クワの樹皮も古くには和紙の原料として使われていたことが記録されている。

木材・合板博物館　副館長　平川泰彦

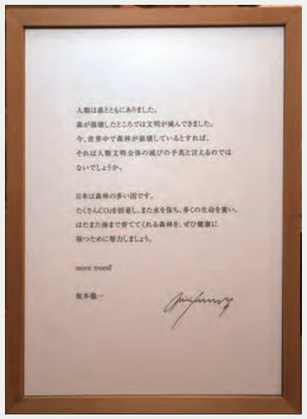
PLY（ぷらい）

PLYとは重ねるという意味があり、
WOODを加えるとPLYWOOD（合板）を意味している。
歳月や経験を重ねることの重要性と、
木材が年輪を重ねて成長する姿も重ね合わせている。

表紙写真：多様性のある森（長野県小諸市）　※ more trees 提供

第26回

PLY
巻頭インタビュー



坂本龍一さんの言葉

人類は森とともにありました。
森が崩壊したところでは文明が滅んできました。
今、世界中で森林が崩壊しているとすれば、
それは人類文明全体の滅びの予兆と言えるのではないでしょうか。

日本は森林の多い国です。
たくさんCO2を固着し、また水を保ち、多くの生命を養い、
はたまた海まで育ててくれる森林を、ぜひ健康に
保つために努力しましょう。

これは、音楽家　坂本龍一さんの言葉である。
メッセージは皆の心に深く刻まれ、
森林保全団体「モア・トゥリーズ」の理念となった。
百年後も人類が森とともにあるために、
彼らは、今も森をつくる仕事をしている。

一般社団法人 more trees 事務局長
水谷 伸吉

人類が損ねた森林を再び人の手で取り戻す多様な森づくり

moreTrees®
都市と森をつなぐ

――地球温暖化や極端な気候変動の原因が、温室効果ガスにあるだろうということは誰もが知る時代です。そしてそれは、産業革命以来続く人間の経済活動により急激に増加しました。人類の活動により大気に放出されたCO2を、森林の力を借りて吸収・固定しかつての地球の姿を取り戻す。遠大な計画ですが、目標に向け具体的に行動している団体、モア・トゥリーズ（※正式には欧文で more trees）を東京千駄ヶ谷に訪ね、団体の設立経緯や環境を取り戻す具体的な活動内容について事務局長水谷様、渉外岸様にお聞きました。

水谷　「モア・トゥリーズは、音楽家の坂本龍一さんが設立した「森林保全団体」です。坂本さんはエネルギー問題、国際紛争や人権など、様々な社会問題に意識を向けコミットしていました。その中の一つに森林問題がありました。本格的に関心を寄せるようになった2007年に正式に立ち上がって以来、「都市と森をつなぐ」というテーマで、グローバルには熱帯雨林など、地球規模の森林破壊に対して警鐘を鳴らしつつ、熱帯雨林が失われるのを食い止め、現地で植林活動をしています。また、国内の林業の活性化や、国産材の循環といったことについても同時に取り組んできました。活動が始まって16年になります。私は団体の立ち上げの時から関わっています。あの時、坂本さんから事務局の運営をしてくれる人が必要だとメールを頂き、断る理由が見つからなかった。ご存知かと思いますが坂本さんは今年の3月に他界され、新代表に隈研吾を迎え新たなスタートを切りました。

文明と森林は、太古の昔から密接に関わってきました。それこそメソポタミア文明、トロイやイースター島などの閉じた世界などもそうです。人類と森林は向き合ってきたので、過剰な伐採など大きなインパクトを与えてしまうと文明は滅びてしまいます。今のまま過度の森林減少や経済行為を続ければ、いつかしっぺ返しが来る。今でこそ脱炭素と言われていますが、坂本さんは16年前には既に地球温暖化や気候変動に危機意識を持ち、行動を起こしていたんです。

森林がCO2を吸収するということに着目することから我々の活動が始まりました。経済の中において森林の価値というのは、どうしても木材の価格で見られてしまうことが歴史的にあると思います。しかし、森林の価値というのはそれだけではなく、多面的機能を持っています。生物多様性も含めて、土砂災害防止や、水源涵養などの他、CO2吸収、固定という機能は森林の大変大きな役割であるということです。CO2というキーワードで、企業や産業、個人の生活者などの都会と、カーボンオフセットなり、CO2の削減など森林との接点を探り、「都市と森をつないでいく」というのが、創立当初から今日に至るまで変わらず我々の活動理念です。」

モア・トゥリーズの森づくり

「僕らが一番始めに着手したのが、高知県梼原（ゆすはら）町との森林協定です。なぜ高知県だったのかと言いますと、この山はどのくらいのCO2を吸収しているのかといったことを、きちんとトン単位まで定量化するという取り組みを、当時の橋本大二郎知事の肝いりでいち早く推進していた県でした。今でこそJクレジットという制度※1がありますけれども…。我々もCO2に着目していましたので、高知県に相談をする中で、梼原（ゆすはら）町とのご縁があって最初の森づくりはスタートしました。

今では皆伐が増え、再造林のニーズがありますが、あの頃は、伐期前の林分が多く、社会的には間伐の必要性に迫られる中、思うように進まないことが林野庁を含めた林業全体の課題でした。我々も間伐を行い、吸収したCO2を定量化していく、というところから始めていました。今日では、高知県で梼原（ゆすはら）町と隣の中土佐町の2町と森林の包括協定を結んでいます。この地域とは設立以来、ずっと一緒に活動させて頂いています。」

――森づくりや都会と森をつなぐには具体的にどのような活動をするのですか？

※1　Jクレジット制度
自治体や企業の取組みや適切な森林管理などによって、排出削減・吸収された温室効果ガスをクレジットとして国が認証する制度。クレジットは売買され様々に活用される。

水谷　「最近は伐期を迎えた林分が増え、スギを伐採した跡地の再造林について、もう一度スギを植えるべきかどうか？　など検討します。急傾斜やアクセスの悪い奥地など、山林経営を考慮した場合に、再び経済林として回すことが不利な場所などは、地場の広葉樹林に戻していくという判断をして植林活動をしています。地域にあったいわゆる天然林に近い状態に戻していってもいいのではないかということです。里に近いなど条件の良い場所は引き続き経済林としてしっかり回していく、そういった色分けがこれから益々必要になってくると思います。

このように、経済林から抜け落ちていってしまった山は、森林に強い関心を持たれている企業にご支援を頂いて育てていきます。森に出資をしていただく事で「◎◎の森」というように森に命名する、いわゆるネーミングライツのような感じです。森を所有するわけではありませんが、フィールドを使って体験イベントを行なったり、社員の研修に使うなど、林分だけでなく地域全体を関わりの場として活用してもらいます。その他ステークホルダーの方を案内したり、その地域で産出される木材を利用し、自社のノベルティや、内装材として使うなど、地域材を使っていただくきっかけとしても森づくりがあるというような感じです。我々が企業に提案するのは、伐採跡地での森づくりと共に、木材利用というのも大事だということです。企業が優先して取り組む社会課題の一つとして気候変動や脱炭素を掲げるなかで、森づくりに着目していただくケースも増えています。例えば2030年までに、カーボンニュートラルを目指しますと宣言した以上は、脱炭素に向けたロードマップを作らなければいけない。そうなった時に、やはり木を植えていますだけではなくて、そこからどのくらいCO2を吸収しているのか、具体的に成果を求められるケースも増えています。

実際に何ヘクタール、何本といった成果は定量化できます。その森で吸収したCO2の量は、林野庁が発表している算定ツールを用いて、公的に定量化された数字を算出できますので、生育状況のレポートと共にサポート企業に提出します。このような取組みを包含して「モア・トゥリーズの森」って勝手に呼んでいるんですよ。ですから個別の林分に対してこれは我々の森だという旗を立てるイメージとはちょっと違います。こういった活動を行っている地域が国内に19箇所、海外に2箇所あります（図1）。土地をお借りし、企業さんや外部の力を借りながら、多様性のある森を作っていく。所有者さんがあって、サポート企業があって、その両輪をつなぎ回していく、僕らは、地域と協定を結び、森づくりに取組むというイメージです。森林の力を借りたCO2の削減はずっと変わることなくモア・トゥリーズの活動の軸の一つです。

モア・トゥリーズの森は、過疎地にあって現場へはさらに山深い中山間地域がほとんどです。あまり条件の良い場所ではないですね。僕らが相談を受け取り組んでいる林分は、経済サイクルからこぼれ落ちているわけですから、おのずと条件は悪いところです。現在、約半数の地域でスポンサーが着いて名前があり、森づくりが展開されています。当初は自治体さんの町有林、村有林が中心でしたが、困っているのは個人所有の方が多いので、最近は一般の民有林にコミットするようにしています。」

人の事情も山の事情もそれぞれ

――国産材の利用状況が近年ではかなり好転しているというニュースを耳にしますが、現場で実感することはありますか？

水谷　「実際のところ、森林経営がしんどいといった所有者さんも潜在的には多いはずです。出荷の問題なのか、再造林の問題なのかというところも含めて、森林を持ち続けることがしんどいという方が、残念ながら多いのかなと思います。コストを掛けたくないから放ってあるが、いずれは何とかしなければいけないといった事情もあります。本人がご高齢で息子さんは町でサラリーマンをしているなどの場合、不良債権化した資産を押しつけるような形になってしまう、ではどうしよう……。そうやって時間だけが過ぎていくというケースも多いですね。それなら1回リセットして広葉樹に戻していきませんか？　という提案をしますと、是非という声があります。そうした場合に、支援企業を見つけ森づくりが始まります。

これは一例ですが、奈良県天川村で植えている樹種は、キハダという樹種ですが、地元の宿坊で昔から売られていた黒い粒の丸薬「陀羅尼助丸（だらにすけがん）」という胃腸薬の原料です。その地域は1300年の歴史がある修験者の村です。キハダは文字通り黄色っぽいのですが、この皮を煮詰めていくとだんだんと黒い色になり、最後これを丸めると丸薬になります。この地域の歴史と産業に関わってきた樹種ですが、戦後の拡大造林の影響でスギ・ヒノキに置き換わってしまいました。そこで伐採された跡地に、キハダを植えて再生させようという取り組みをしています。このように単純に広葉樹にしたから経済活動を諦めるということではなく、ケースに応じて経済活動と紐付けていきます。キハダの場合は択伐です。選択して伐ることで、森としての機能は保ちながら出荷します。例えるならば、元本はそのままで利子だけをいただくという感じです。このように山としての機能を維持したまま経済活動を行うことで、地元の産業として成り立ちます。似たような取り組みが和歌山でもあります。ウバメガシという紀州備長炭の原料になる木を植えています。これも最終的には伐採し出荷するんですが、こちらも択伐をします。そうすることで切り株からまた新しい芽が生えてきます。

こういったサイクルを20年から25年で繰り返す、常に森としての「カタチ」を維持しながら、伐った分だけいただくと言う事です。このように森から生み出せる価値も多様性があって良い。スギ・ヒノキから良い木材が採れることと同じように、キハダやウバメガシからも恵みがあるわけです。要は未来への選択肢がたくさんあったほうが良い。未来の人達がその中から選んでアウトプットすれば良いので、我々が最初からその選択肢を狭める必要はありません。奥山の広葉樹だからといって、経済活動を諦める必要は必ずしもないということですね。」

写真8　渉外の岸さん（左）と事務局長の水谷さん。お二人に個人的な目標を聞きました。

私は子供の頃に、温暖化で地球が滅びるテレビ番組を見た後、ずっとその怖さを抱えていました。同じように潜在的に地球の事が心配な方達を巻き込み、大きな動きにする役割りをこの団体で担いたいという気持ちです。（岸）

生態学や造林学を学んだ方は、研究者か公務員になるのが一般的でしたが、モア・トゥリーズのような新たな立ち位置で活動する組織がもっと伸び、新たな選択肢となればいいなぁと思います。なにより3人いる子供達に恥ずかしくない、誇れる仕事を続けたいですね。（水谷）

僕らに何が出来るのか―3.11 東日本大震災

震災のわずか3日後のことです。岩手県住田町が行政として93棟の仮設住宅を地元の木材でつくろうという構想を実現に移します。僕らmore treesが、何が出来るのかと思案をしている時のことです。これほどにも早く行動を起こす自治体があることを新聞で知りすぐにアプローチをしました。そこで、同じ志をもっているなら一緒にやろうよと言っていただきました。住田町は陸前高田市の一つ内陸にあり、直接の被災地ではなかったため、事業は当時の災害救助法の対象とはなりませんでした。住田町は約3億円の費用を自ら支払うつもりだったのです。しかし、「どうしてこんなに素敵な取り組みを町が自腹でやらなくてはならないのか」という違和感のようなものがありました。国や県に頼れないないなら、more treesでやろうという思いから、我々は「LIFE311」プロジェクト※2を立ち上げ、住宅の建設費用とペレットストーブの導入費を支援することにしました。募金サイトを立ち上げ、広く資金を募ったのです。

写真7　住田町長（当時）と水谷さん

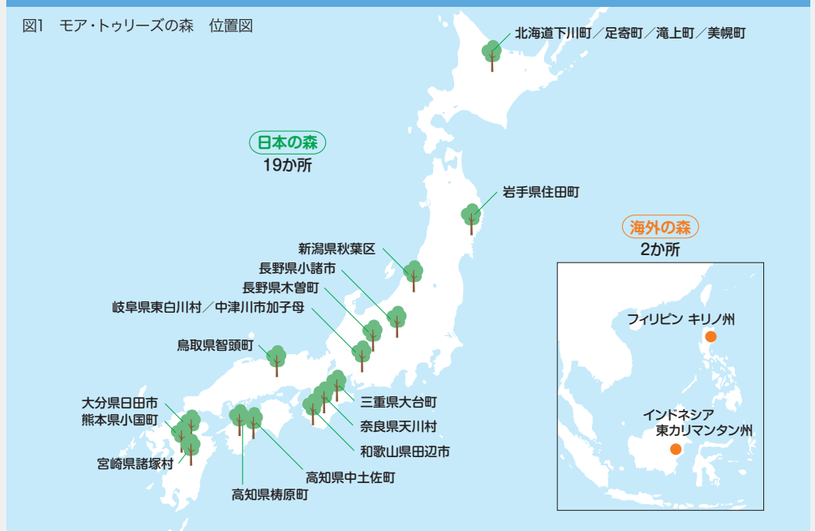
住田町の木造仮設住宅

後になってから災害救助法が適用になりましたが、町はそれを断りました。「何を今さら、我々はmore treesと一緒になって民間から募金を集めてきたんだ、それを認定されたので募金は返しますというわけにはいかない」ということです。僕らも逃げるわけにはいきません。当時、坂本さんは現地に通い、仮設住宅の皆様と交流を重ねていました。（水谷）

※2　『LIFE311』プロジェクト
2011年に発生した東日本大震災の被災者のため、木造仮設住宅建設を開始した岩手県住田町に資金援助を行う被災地支援プロジェクト。

モア・トゥリーズの森

図1　モア・トゥリーズの森　位置図



森づくりの様々な活動

写真1　植林体験ツアー

写真2　企業の植林イベント

写真3　植林地の生育調査

写真4　森林づくりフォーラム　登壇

写真5　多様性のある森づくり勉強会

写真6　森林再生プロジェクト（育苗）

損ねた環境の回復に向けて

――モア・トゥリーズは、環境保全に関する講演活動や、学生を対象にした木育関連のスタディツアーの講師をしています。近年では環境を取り巻く様々な行動指針が示され、環境問題に対し世界の国々に具体的な行動を求めています。講演やワークショップなどを通して一般の方々や学生の皆さんにどのようなお話をされているのですか。

水谷　「少し聞き慣れないかもしれませんが、ネイチャーポジティブ※3という言葉があります。世界のGDPの約半分は、自然資本により成り立っています。自然資本とは水や空気のほか木材といったものです。人類はそれらに依拠し、お世話になっているということです。つまり我々は、先人から受け継いできた資源を食い潰し、生物多様性を損ねて経済活動を行ってきたわけです。これを続ければ経済活動だけでなく、人類が破綻していくという考えの基で、自然資本へのダメージをこれ以上与えない、むしろポジティブに転換して損なった分は2050年までに回復していこうというのがネイチャーポジティブの考え方です（図2）。日本はもちろんですが、ほぼ全世界の国々が参加した国際的な枠組みです。その達成に向けた30 by 30※4という行動目標も示されています。これは、2030年までに陸の30%、海の30%を保全していくというものです。日本では国立公園や国定公園だけでは、面積的には全く足りていません。保護地域以外の生物多様性に資する民間の土地も含めて、いわゆるOECM※5ですね、森林とか湿地とか海とかそれらを全て含めて30%目標を達成しようと環境省主導で取り組んでいるところです。」

岸　「社会問題スタディツアーというのは、東京の一般社団法人※6が企画・運営しています。我々は講師として学生の皆さんを案内し、講師を務めています。対象は中高生です。初めに、今、世界の森林や日本の森林がどのような状況であるかを理解できるよう話をします。世界の森林はご存知のように減少していますが、その減少のスピードを理解する実感が無いと思うので、そこを分かり易くします。例えば1秒間に失われていく森林の面積は、テニスコート12面分であるとか、2秒間にサッカーグラウンド1面分の速度であるとかですね。そのような形で伝えているのが一つです。次に何故それが減っているのかなどの説明です。大半が開墾のために燃やしてしまい、一定の面積を農地に転換していることや、木材として伐採しているということですね。なぜそのようなことが起こるかといえば、世界で最も使われている植物油脂に「パームオイル」というものがあります。我々の身近なマーガリンやポテトチップス、ハンバーガーショップのポテトの揚げ油などに使われています。インドネシアやマレーシアでは、このパームオイルを生産するために、森林を切り開きアブラヤシの畑にするという行為が日常的に行われているのです。このように自身の身近な食品などと関連があることを例に、自分事として考えられるように伝えています。

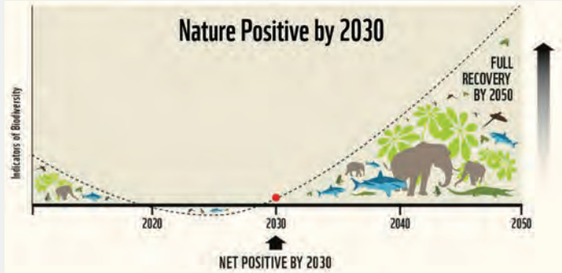


図2　ネイチャーポジティブロードマップ　出展：naturepositive.org Webサイト

熱帯雨林は絶対に伐ってはいけないのかという問題になると、さらに複雑なんですが、サステナブル・ラベル※7というものがあることを生徒に紹介し、適切に管理を行う木の伐採・利用はけっして悪いことではないんだ、なるほどとなります。

日本の森林については、国土の約7割が森林で、十分な資源があるのだということ。しかしその資源が十分に使われず、資金不足で手入れがなされなかったり、その一方で、木材として使い易いスギ・ヒノキなどの樹種に偏ってしまい、生物多様性が損なわれた状態であることの説明が重要です。また、手入れのされない暗い森では、下草が失われた結果、表土の流失や脆弱な地盤により、土砂災害の発生リスクが大きくなっているということなどを説明します。だから日本の森林資源は適切に使ってやることが大事だよねということです。これらは難しい内容になりますが、学生の皆さんは理解してくれています。」

水谷　「これは一例ですが、「丸太1本いくらだと思う」と聞きます。50年育てた直径15センチの3～4mの丸太です。5万円？　10万円と予想が出ますが、「いや2千円もしないんだぞ」って言うと、ウェーってなるわけです。手塩にかけた丸太が、言ってみればこの程度だということにみんな驚く。「木材は山の価値の一つですから、そこが適正に評価され森のサイクルを回していくには、都市部で木を使い、それを適正な価格で評価してあげる必要があるよね」。そういう話しをすると、そっか、熱帯雨林の伐採と、日本の森林の伐採とは別の事なのだと理解できていると信じていますし、後のアンケートを見てもそう思います。」

――今の若い人達は、生まれた時から環境問題に取り組む社会で育った世代ですが、そうった環境問題に対する素地というものがありますか？

「そうですね、SDGsなどは学校でも学んでいるようですから、大人よりも子供の方が詳しいかも知れませんし、意識も高いと思います。未来に我々より強く環境の影響を受けるのはそういった子供達ですから、より自分事として捉えられているのではないでしょうか。その代表として海外から始まったFFF運動※8があると思います。金曜日に大人達に対して意見を言う、気候変動などに対しても、きちんと取り組むよう強い意見を学生が中心になって大人に向けて発信する。そういった様子は我々が開催している催しなどでも感じることができます。今はデジタルネイティブの時代ですから中・高校生、大学生だったら普通にTik TokやYouTubeで、世界で何が起こっているのかを敏感に察知します。ネットを使った情報収集に優れています。一方ではアナログに対して弱いところがあり、それだけに木育の実体験という要素は、これからとても大事になってくると思います。」

人間だけじゃないということ

――ここまで16年間にわたり活動をされきたわけですが、現時点において more trees が達成できたと思うこと、今後の活動課題など教えてください。

水谷　「これは本来、坂本さんに聞きたいところですが、おそらく坂本さんは「まだまだ」と言っていると思います。坂本さんは教授というニックネームで知られていましたが、先見性があり博識のブレーンの方々に囲まれた中で、自分なりに咀嚼し考える方でした。「もっと僕らが関われる、出来ることがあるはずだ」と、お尻を叩いているのではないでしょうか。とはいえこの16年間、私も教授とゼロから一緒にやってきた人間として、この2～3年でようやく森林保全団体としての基盤が出来つつあるなという感じがしています。それまでは、よちよち歩きだった気がしています。今後、伐採した跡地に何も植えられないで放棄されている、奥山の再造林放棄地（図3）と言われている場所に注目していきます。近場の緩い斜面、肥えた土地など木材生産に向いている里の方はいいですが、奥山や急傾斜地など、木材生産に不向きなところは、伐採後放ったらかしになっている土地が年々増えています。ここに広葉樹を中心とした多様性のある森をつくっていきたい。僕らとしては、木材生産そのものを否定するわけではありませんし、単一人工林を否定するわけでもありません。やはり、それをうまく回せる森とうまく回せない森があるのだと、色分けしなければいけない時期にきているということです。回せる森は回せば良い、そこからこぼれ落ちた森を、企業や一般消費者の方と一緒に回していこうというのが課題です。ダイバーシティ（多様性）が求められるのは、人間社会だけじゃないということですね。」

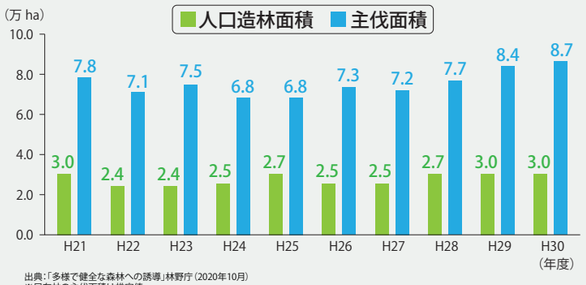


図3　年度別再造林放棄地面積

水谷伸吉（みずたにしんきち）氏のプロフィール

一般社団法人 more trees　事務局長

略歴
- 1978年東京生まれ。
- 慶応義塾大学を卒業後、2000年より㈱クボタで環境プラント部門に従事。
- 2003年よりインドネシアでの植林団体に移り、熱帯雨林の再生に取り組む。
- 2007年に坂本龍一氏の呼びかけによる森林保全団体「more trees」の立ち上げに伴い、活動に参画し事務局長に就任。

一般社団法人 more trees
https://www.more-trees.org/

写真10　「つみき」を使った木育ワークショップ

※3　**ネイチャーポジティブ**
2022年に採択された生物多様性に関する国際的な枠組みで、2050年までに生物多様性の回復を図るという世界目標。

※4　**30 by 30（サーティー・バイ・サーティー）**
ネイチャーポジティブの目標を達成するために、2030年までに生物多様性の損失を止め、反転させ、回復軌道に乗せる。世界の陸地と海洋の30%以上を保全するという具体的な行動目標。

※5　**OECM（Other Effective Area-based Conservation Measures）**
保護地域以外で生物多様性保全に資する地域（里地里山、企業の水源の森など）。

※6　**一般社団法人リディラバ**
修学旅行・校外学習を主体性を育む学びの場にというコンセプトで、SDGs／社会問題スタディーツアーを企画・運営している。

※7　**サステナブル・ラベル**
持続可能な原材料調達や、環境・社会的配慮、生物多様性につながるさまざまな国際認証ラベルを一般社団法人日本サステナブル・ラベル協会が普及活動のために命名したラベル。

写真9　サステナブル・ラベル（例）　有機JASマーク：農産物、加工食品、飼料、畜産物及び藻類に付けられている。
この他にも多数のラベルがある。それらは一般社団法人日本サステナブル・ラベル協会のWebサイトで確認することができる。《URL》https://jsl.life/

※8　**FFF（Fridays For Future）運動**
グレタ・トゥーンベリさんから始まった、気候変動に対する行動の欠如に抗議する運動。世界的なムーブメントになっている。

いつもと違う景色 静寂の中で過ごす至上の時間 さぁキャンプをはじめよう

美しい自然や新鮮な空気の中で過ごす、癒された心はエネルギーを回復し、都会のデジタルの波の中にまた帰ってゆきます。今や電化された生活は便利至極であるはずですが、時にデジタルデトックスを求めて人々は自然の中へと向かいます。近年、グランピングといった新しいカタチで自然を感じることができるようになりました。そうしたアウトドアブームはコロナ禍でも衰えるどころか、さらに加速して今日に至っています。初心者からベテランまで、自然を求めて「キャンプする人たち」が、より快適なキャンプ体験をするために大切なのは装備品と準備です。そこでキャンプのプロに極意を聞こうと、ogawa（キャンパルジャパン株式会社）の直営店舗ogawa GRAND lodge 新木場を訪ね、ストアマネージャーの大森様にお話を伺いました。

はじまりは小川治兵衛（じへい）商店

――「ogawa」ブランドは、1914年に「小川治兵衛商店」（写真1）として創業しました。当時の主製品は日本軍が使用する軍用テントで、他に集会や工事現場、各種催し用テントを製作・販売することが事業の中心でした。戦後の1946年からは「小川テント株式会社」に変更、テントを中心とした製作販売体制からリュックやスキーウェアなど、多種多様なキャンプ用品を扱う今日の業態になりました。

大森「50年代になりヨーロッパでレジャーブームが起こります。それを目の当たりにした当時の社長は、これからの日本に訪れる「キャンプ」という屋外型レジャーの時代を予見しました。そこで日本の環境に合わせた、日本仕様のロッジ型のテントを作りました。これまでの業務用製品の時代から、レジャーへとニーズが変化していきます。欧米には1964年から輸出を開始しています。ogawa の製品をキャンプ発祥国が認めてくれたことは、品質の証だと思っています。弊社テントは様々な型を持ち、ボーイスカウトや商店街、各種イベントなどで利用が広がっていきます。近年では災害時に避難所で活躍するなど、自治体や行政の利用もありました。またコロナ禍にあり、病院の院外診察などに常設テントが利用されたりしています。」

――ここ新木場に直営の店舗を構えたのはどのような理由からですか？

大森「お客様の声に、品物を見たい、触りたい、どこに行けば実物に触れることが出来るのかといった問い合わせが多くありました。それらの声に応えるため、弊社としては直販店の出店を計画しました。ここ新木場は本社からも近く、店舗前の道路若洲線を羽田空港方面に進むと「若洲公園キャンプ場」、さらに足を延ばせば「城南島海浜公園キャンプ場」や「平和島公園キャンプ場」があります。23区内でしっかりとキャンプのできる場所が近くに3箇所あり、より多くのキャンパーの方の目に留まり利便性も良いといった魅力があったからです。直営店を設けたことで、ogawa のスタッフは設営のレクチャーをしたり自分の経験をお客様に話すことができ、お客様は直接製品に触れることが出来るといったメリットを認めてもらえています。

我々と同じようにテントなどのキャンプ用品を製造販売する企業は他にも多くあります。コロナ禍において、行動制限を受けた人々の意識がアウトドアに向いたことで、マーケットも広がりを見せ、参入する企業も増えたように思います。また、量販店さんなどがオリジナル製品を開発していたりしていますので、我々もお客様の声に耳を傾ける大切さを強く感じています。」

――ブランド周知などを含め、力を入れている広報活動などはありますか？

写真1　小川治兵衛商店外観

大森「ogawa の社会貢献の一つに、CAJ※1に加盟し、自然環境保護活動に参加していこうという取組みがあります。2020年度までに9，200万円を拠出するなどし活動を応援しています。また、イベントへのテントの貸し出し、アウトドアフェスへの出展、さらに、自治体と災害時の救援物資提供に関する協定を結ぶなどを積極的に行っています。」

――現在、ユーザーの中心はどのような方々が多いのですか？

大森「お客様は家族でキャンプをする30～40代の方が中心です。キャンプを始めて数年たった方が、これから本格的にやっていくのにしっかりしたものに買い替えたいなど、買い替えニーズに ogawa を選んでもらっています。また、子供たちが大きくなり一緒にキャンプに行かなくなり、これからはサイズダウンして夫婦だけで楽しみたいといったお客様も増えています。これからキャンプを始める若い人たちには少し値が張る買い物かもしれませんが、品質には自信がありますので長く使うものとして是非検討していただきたいですね。

先ほど少し触れましたが、キャンプ用品はそのまま防災用品として機能します。そのような理由から、徳島の店舗では徳島市と防災用品の提供に関する協定を結んで、協力関係を築いています。ベッドは消防関係でも実績があるなど、個人だけでなく、団体や自治体にも利用して頂いています。」

※1　**CAJ（The Conservation Alliance Japan）**
（一般社団法人コンサベーション・アライアンス・ジャパン）
アウトドアビジネスで得た利益の一部で、自然環境保護を行う団体。
2000年7月、任意団体として設立され、2019年4月、一般社団法人化。

写真2　（左）ロッジシェルターⅡ　（右）ロッジシェルターT/C

「キャンプをする」ということ

――大森さんはご自身も週末はキャンプ生活を楽しんでいるそうですが、一緒に行くお子さんにも大きな変化があったそうです。

大森「私は家族とキャンプに行きます、さすがに毎週は無理ですが、月1回は行きたいですね。商品に関するお客様の問い合わせも多いので、実際に現場に持ち込んで道具を使い、使用感や経験をお客様にお伝えしたいという思いもあります。

一緒に行く息子は普段、YouTube を見たりゲームをして過ごしていますが、キャンプ場では、アスレチックなどの施設がなくとも、自ずと山を駆け上がったり、木の枝で何かを創るなどを始めます。そして普段より積極的に手伝いをします。特に薪割りなどは、カンカンと割るのが気持ちいいようですね。もちろん心配はありますが、任せることで自分からどんどんやるようになります。これをやる？　あれはどう？　などですね。米を研ぐなど家では炊飯器でやってといっても面倒でやらないのに、キャンプに行くと積極的に手伝う、それは嬉しく思いますね、そういった子供の非日常の経験は良いことだと思います。」

――「キャンプ」というのは、どうして特別な体験になるのでしょう？

大森「普段我々の見ている景色というのは、建物や車があり、煌々と照る光がありその中で暮らしていますが、林間にはそういったものが全くありません。いつもと違う景色です。キャンプでやることはテントを建て食事をして夜は寝ます。普段の生活とそれほど違いませんが、空、月、星を見るとき、街の中と森の中とではその見え方が全く違います。明るさも星の数も違う。そして静寂の中に風の音、虫の音など自然の音があります。見えている景色や感じるものが違うのです。それは良い意味での現実逃避であり、癒しに繋がっているのではないかと思います。今の社会はとても便利ですが、人と居るのにスマホを見てしまったりします。それらを一旦遠くに置いて、飲んだり食事をすると、目の前の人と会話をします、普段話せないことでも、より深く話せたりします。良いコミュニケーションがとれる、そういった機会になりますね。」

キャンプの新しいカタチ

――ogawa は2022年7月からキャンプ場の運営を開始しました。キャンプ用品の販売だけではなく、キャンプの機会、使う場所を提供するという考えから、千葉県柏市の手賀にプレオープンしました。（写真3）

大森「お客様の要望に応えられるよう、ここに直営店を設けたわけですが、その次の声として、実際にキャンプ場で触ってみたい、使ってみたいといった要望がありました。そのような方々に、環境を作って提供したいという思いがありました。キャンプ場というのは、車で数時間をかけて移動し、奥深い自然の中にあるイメージが強いと思います。東京や千葉、神奈川の奥地です

写真3　ogawa GRAND lodge FIELD（千葉県柏市手賀）

よね。しかしそうではなく、千葉県柏市という都心からも、その近県からも近いところでキャンプを体感してもらえる場所ということでここ柏に開設しました。まだプレオープンなのですが、休日は予約で埋まり、平日に若干余裕があるといった状態で、おかげさまで好評を得ています。

現場ではテントなどのレンタルもしています。売店も併設されていますので、チェアやテーブルなどギア類を触って購入していただくことも可能です。

元ゴルフ場だった場所で、芝生は気持ち良く、自然を感じることができアクセスも良好です。ogawaのスタッフが常駐していますし、トイレやシャワーなども完備、設備が充実していますから生活に不自由はありません。野趣あふれるキャンプ場ではありませんが、キャンプ入門や、仲間での集まりやすさなどで利用してくだされば嬉しいですね。

今、ogawaのスタッフとogawaファンの方々が一緒にキャンプをして、夜、たき火を前に語り合うといった会を開催しています。OGC(ogawa GRAND lodge CAMP)というイベントですが、それを柏(写真3)のキャンプ場や全国のキャンプ場さんと協力しながやっています。是非参加してみてください。

――これからキャンプを始める人に助言をお願いします。また、大森さんの一番のお奨め製品を教えてください。

イチオシテント、おススメです!

大森「キャンプを始めるにあたっては、いろいろ道具を揃えるわけですが、必ずしも全部が全部必要というわけではありません。レンタルなども利用しながら、最低限の装備品を揃え、マナーを守りながら軽い気持ちで始めてもらいたいです。その後に必要な物を買い足したり、道具を探すのも楽しいものです。定年を迎えた方などでも、一度店舗で設営講習を受けてから、北海道や九州などへ行かれる人達もいます。

最近の楽しみ方として、バルコニーやテラスをキャンプ場のように使い、チェア、テーブル、バーベキュー台などを置いて、食事をしたりお酒を飲んだりしてキャンプ場の雰囲気を楽しむ「ベランピング」というものがあります。お客さんの中にも「キャンプをやるわけではないけれども、屋上で何かやりたい」ということでチェアとテーブルを買っていかれた方がおられました。キャンプではありませんが、都会でもこのように道具を使い手軽に雰囲気を楽しむことができます。場所は関係ありません、外の空気を吸って空を眺めるということが大事なのだと思います。ランタンの火を灯すだけで雰囲気が出ますし、パラフィンのオイルを使えば煙も出ないので室内でもオーケーです。

さてテントですが、昔はA型といってとんがり屋根のテントが多かったのですが、ogawaではロッジ型という、山小屋のようなテント「オーナーロッジシリーズ」が主製品です。弊社のロゴマークのモチーフになっているものです(図1)。60~80年代のカタログはロッジ型ばかりでしたが、2000年代に入るとドーム型やモノポール型など多種多様に増えました。

私のいち推しはこちらのロッジ型テントです(写真4)。広さは3.1m×3.6mくらいですね、天井が高く、居住性が良い。横に張り出して外に空間が作れる。大きなメッシュによって風通しが良い、山小屋風になる格子の窓が他社にはない意匠で人気です。ここをかわいく飾る女性もいたり、外観をきれいにするといった楽しみ方も近年の楽しみかたです。ポイントはスチールポールを使いとても強靭であることです。おかげで壁面が垂直に近い、ドーム型などと比較すると、こちらは家のように真っすぐですから居住性に優れます。設営は慣れた方なら20~30分程度、始めての方でも1時間あれば可能です。強靭な反面、可搬性がややネックですが、バッグに入れた状態でおよそ25kgです。設営は1人でも出来ますがフレームや幕体に負荷がかかるため、長く使うために2人が良いですね。

テントは寝るだけでしたら小さめでも良いですが、過ごす事を考えるとやや大きめが快適です。道具も変化し、焚き火や薪ストーブなどの従来の楽しみ方から、電気を使った新しいスタイルも始まっています。火はやけどや一酸化中毒の危険を伴いますが、電気カーペットなどにより、小さい子供がいるような家庭の不安を減らし、危険を回避できます。アクティビティーや遊びの部分でも、プロジェクターなど持ち込んで森の中で映画を観るといった楽しみ方もあります。そういった点でこれからは、電気を活用したキャンプも良いのではないでしょうか。野趣あふれるところを目指すのも良し、少し便利に使えるキャンプ場や道具を使うのもひとつの楽しみ方だと思います。

――固定観念に捕われずキャンプのスタイルを楽しむ。様々な形があっていい、それぞれのスタイルで楽しむことこそが大事とおっしゃいます。次のキャンプの前に大森さんに相談してみてはいかがでしょうか。

図1 logoマーク

お話を聞いたストアマネージャーの大森さん

「僕は千葉県富津市の山寄りで生まれ育ちました、森の中で、田園風景があってという所で自然に触れて育ちました。そういう環境でしたからキャンプという発想からはそもそも遠かった。初めてのキャンプは、友人たちと遠出しました、20歳の頃ですね。何の知識もなく、今のように道具もそれほど多くない中で、やれることも少なかったけれども、普段と違う環境の中で、気心の知れた仲間たちと火を囲みながら御飯を食べる。夏は川で冷やしたスイカを割ってといった、平凡な事ですけれどもそれがとても楽しかったですね。仕事を楽しもうと思ったら、自分の興味のあることをやりたい、そうしないとなかなか熱が入らないたちなので、キャンプ用品を売りたいという思いから好きな業界に巡り会うことが出来ました。(大森)」

写真5 オーナーロッジタイプ78R

写真4 大森さんイチオシのテントはこれ! オーナーロッジタイプ78R

写真6 上左/店内に陳列されたキャンプ用品の数々 上右/棚の中には様々なタイプのテントが収まる
下/広い店内には大小テントが3張り展示されていた

キャンパルジャパン株式会社
本社:〒136-0076 東京都江東区南砂2-36-10 光陽ビル4F
TEL:(03) 6666-2935(代表)/FAX:(03) 6666-1417
〔事業内容〕
各種宿泊用キャンプテント及びキャンプ用品の企画・製造・販売/各種業務用テントの企画・製造・販売/防災用品及び介護用品の企画・製造・販売/キャンプ場及びスポーツ施設の企画・設計施工及び運営/宣伝広告に関する企画

ogawa GRAND lodge 新木場
〒136-0082 東京都江東区新木場1-12-19 -1F
TEL/ FAX:(03) 6457-0306(共通)
https://www.campal.co.jp/

PLY 第26号 2023 AUTUMN

【発行日】 2023年9月15日 ■定価:1,100円(消費税込)
【発 行】 木材・合板博物館
〒136-8405
東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー 3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
E-mail info@woodmuseum.jp
【発行者】 吉田 繁
【編 集】 佐藤雅俊(編集長)
PLY 編集委員会
【デザイン】 株式会社デジタルアート

編・集・後・記

森と人をつなぐ諸活動は、一般の方々に森林や木材等を身近に感じ、森林資源を通して地球環境を考えていただくために重要です。巻頭インタビューでは、これらを実践されている more trees(故坂本龍一氏の自然や森林に対する思いや考え方等を基に創立)について、国内外の森林等における各種のプロジェクトやアプローチ、当館とも関連のある「SDGs/社会問題スタディツアー」における、中・高校生等の自然環境に対する意識向上のための教育など、森林にまつわるいろいろなお話を伺いました。木を楽しもうでは、森林と人間との係わりを体験する野外活動に欠かすことの出来ないキャンピング、それに必要なテントを中心としたキャンピング道具等の専門店、ogawa GRAND lodge 新木場で、キャンプの意味合い、さらにキャンプの新しいスタイル等についてご紹介いただきました。(S)

木材・合板博物館のご案内 https://www.woodmuseum.jp/
開館時間 10:00~17:00(最終入館時間16:30)
休館日 月曜日、火曜日、祝日、年末年始 ※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。
所在地 東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F
TEL 03-3521-6600/FAX 03-3521-6602
\入館無料/
facebook HP Map